



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『思はぬ方にとまりする少将』注解
Author(s)	後藤, 康文
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 165, 61(右)-91(右)
Issue Date	2021-12-08
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.165.r61
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/83552
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_165_Goto.pdf



『思はぬ方にとまりする少将』 注解

後 藤 康 文

一 ― 右大将の少将と姫君の契り ―

【本文】（底本＝高松宮本）

昔物語などにぞ、かやうのことは聞ゆるを、いとありがたきまであはれに、浅からぬ御契りのほど見えし御ことを、つくづくと思ひつづくれば、年の積もりにけるほども、あはれに思ひ知られけり。

大納言の姫君二人ものし給ひし、まことに、物語に書きつけたるありさまに劣るまじく、何ごとにつけても生ひ出で給ひしに、父大納言も母上も、うちつづき隠れ給ひにしかば、いと心細きふるさとながめ過ごし給ひしかど、はかばかしく御乳母だつ人もなし。ただ、常にさぶらふ侍従、弁などいふ若き人々のみさぶらへば、年に添へて、人目まれにのみなり行くふるさに、いと心細くておはせしに、右大将の御子の少将、知るよしありて、いとせちに聞え

わたり給ひしかど、かやうの筋はかけてもおぼし寄らぬことにて、御返りごとなどおぼしかけざりしに、少納言の君とて、いといったう色めきたる若き人、何のたどりもなく、二所御殿籠りたる所へ導き聞えてけり。もとより御心ざしありけることにて、姫君をかき抱きて、御帳のうちへ入り給ひにけり。おぼし呆れたるさま、例のことなれば書かず。推し量り給しにも過ぎて、あはれにおぼさるれば、うちのびつつかよひ給ふを、父殿聞き給ひて、

「人のほどなど口惜しかるべきにはあらねど、何かは、いと心細き所に」

など、許しなくのたまへば、思ふほどにもおはせず。姫君も、しばしこそしのび過ぎ給ひしか、さすがにさのみはいかがおはせむ。さるべきにおほし慰めて、やうやううちなびき給へるさま、いとどらうたくあはれなり。昼など、おのづから寝過ぎ給ふ折、見奉り給ふに、いとあてにらうたく、うち見るより心苦しきさまし給へり。

何ごともいと心憂く、人目まれなる御住まひに、人の御心もいと頼みがたく、「いつまでか」とのみながめられ給ふに、四五日いぶせて積りぬるを、「思ひしことかな」と心細きに、御袖ただならぬを、われながら、「いつ慣らひけるぞ」と思ひ知られ給ふ。

人心あきのしるしのかなしきはかれ行くほどのけしきなりけり

「など、手習ひに慣れにし心なるらむ」などやうにうちなげかれて、やうやう更け行けば、ただうたた寝に、御帳の前にうち臥し給ひにけり。

少将、内裏より出で給ふとて、おはしてうちたたき給ふに、人々おどろきて、中の君起こし奉りて、わが御方へ渡し聞えなどするに、やがて入り給ひて、大将の君のあながちにいざなひ給ひつれば、初瀬へ参りたりつるほどのことなど語り給ふに、ありつる御手習ひのあるを見給ひて、

常磐ときはなる軒のしのぶを知らずしてかれ行くあきのけしきと思ふ

と書き添へて見せ奉り給へば、いと恥かしうて、御顔引き入れ給へるさま、いとらうたく児こめきたり。

【注解】

○積つもりにける——底本以下「つもりける」に作る伝本も少なくないが、この場合「ける」は「にける」である方が望ましいため、三手文庫本等により、完了の助動詞「ぬ」の連体形「に」を補った。○思おもひ知られけり——けり」は底本ほか諸本「けむ」。しかし、文末が過去推量の助動詞「けむ」で結ばれたのでは、以下の出来事を回想する語り手の前口上はうまく解釈できない。よって、「む（毛）／ん（无）」は「り（利）」の誤写である可能性が高いと判断して改めた。○父大納言——底本ほか諸本「こ大納言」。「こ（古）」は「ち（知）」の誤写とみて改めた。参考「父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの人のよしあるにて」（『源氏物語』桐壺巻）。○知るよし——つてとなる人物の意。ここは、右大将の少将と昵懇の間柄にある女房のことであり、このあと彼を手引きする「少納言の君」と同一人物と考えられる。参考「奈良の京春日の里に、しるよしして、狩にいにけり」（『伊勢物語』初段）「尾張の国に、しるよしありて、しばし侍るけるころ」（『千載集』羈旅・よみ人知らず）など。○たどり——底本ほか「たより」「よ（与）」は「と（止）」の明らかな誤写であるため、李下亭文庫本等末流伝本本文と同形の「たどり」に改訂した。「たどり」は思慮分別の意。○導き聞えてけり——聞えてけり」は、底本「聞てけり」と写したあと、「て」を見せ消ちにして「え」に訂正する措置を施している。「え（衣）」と「て（天）」の字形相似に原因する書写上の混乱が読み取れておもしろいが、こうした経緯からしても、完了（強意）の助動詞「つ」の連用形「て」は元来あったと考えてよい。よって、三

手文庫本等によりこれを補った。「てけり」とあつてこそ、当該文脈にふさわしい「本来すべきではない／しない方がよいのに、とうとうしてしまつた」のニュアンスが付加されることになるのである。参考「この男かいまみてけり」(『伊勢物語』初段)「あるじ許してけり」(同第五段)○御帳のうち―底本ほか「みずのうち」とする。この注記に従えば「御簾のうち」と読めるが文脈にそぐわない。「て」は漢字「丁」の誤写と考えて「御帳」の意に解くべきことと論を俟たない。○例のこと―物語のお約束。冒頭で自身が見聞した実話を披露するやに思わせた語り手が、ちらりと「馬脚」を顕してみせるのである。○給ひしにも―底本ほか諸本ほとんどが「給にしも」に作る。だが、これではまったく意味が通じず、「にし」が「しに」の転倒形にほかならないこと明白である。ゆえに、二文字の順序を入れ替えて本文を正した。○ほどなど―底本ほか「なと」ナシ。「ほ(保)」と「な(奈)」の目移りによる脱落を想定し、三手文庫本等によりこれを補った。○姫君も―底本ほか「君も」。また、三手文庫本等で「女君」。作中、故大納言家の長女は、主従、姉妹といった他者との関係性に基づく場合を除けば、一貫して「姫君」と呼ばれるので、ここに関しては「ひめ」または「姫」の脱落を想定するのが妥当。なお、「女君」の異文は、「ひめ君」↓「め君」↓「女君」の過程をたどって生成された産物。○しのび過ごし―この「しのぶ」は、我慢してこらえる、堪え忍ぶの意。○何ごとともい―底本表記「何事いと」。「こと(己止)」と「も(毛)」が連続したための目移りが原因で、ある時「も」一字が脱落したのであらう。よって、三手文庫本等諸本によりこれを補った。○いつまでか―底本ほか諸本「いつまで」。転写の過程で「か」一字が脱落したものとみてこれを補った。「壁に生ふるいつまで草のいつまでかかれず問ふべき篠原の里」(『堀河百首』・藤原公実)を引く。参考「松も昔の、とのみながめらるるにも、もとよりなどのたまふ筋は、まめやかに頼もしうこそは」(『源氏物語』蜻蛉巻)など。なお、この公実歌は、『浅茅が露』や『とはずがたり』

など他の後代作品にも引かれている。○ながめられ給ふに―「られ」は自発の用法。○かなしきは―底本ほか主要諸本「かなしきに」。この一首は「ののくはくなりけり」の類型に属する歌と判断して、「に」を「は」に改めた。おそらく「者」↓「爾」の誤写であろう。第三句「かなしきに」のままではどう足掻いても解釈不能歌となる。参考「たよりにあらぬ思ひのあやしきは心をつくるなりけり」（『古今集』恋一・在原元方）「山隠れ消えせぬ雪のかなしきは君まつの葉にかかるなりけり」（『兼盛集』）など。○うちなげかれて―ふいにため息が漏れるのである。「れ」は自発。

【現代語訳】

昔物語（の中）などに限って、このよう（に摩訶不思議）な話は見聞きするものであるのに、ほんとうに比類ないまで愛情深く、（決して）浅くはない御縁のありようが（如実に）窺われた（あの）出来事を、（今こうして）感慨に耽りながらとめどなく思いつづけると、（無情にも）過ぎ去った歳月の積み重なりも、しみじみと思い知られるのであった。（さて、その出来事とは…）

大納言のお嬢様が二人いらしたのだが、ほんとうに、どの点を取ってみても、物語に描いた（姫君の）様子に劣るはずがなく、（美しく）成長なさったのに、（何ともご不幸なことに）父大納言殿も母上様も、（折から）たてつづけにお亡くなりになってしまわれたので、（やむをえず）たいそう心細い昔ながらのお屋敷で、もの思いに沈んでお過ごしになったのだけれど、しっかりとして乳母の代役を果たす（年配の）女房もいない。わずかに、いつもお側でご利用を勤める侍従や弁などといった、若輩の女房だけがお仕える（ありさまだった）ので、年が経つにつれて、訪れる

人もなくなつていく一方の昔からのお住まいに、(物心ともに)とても頼りない状態でいらしたところ、右大将殿の御子息の(近衛の)少将が、(そのお屋敷にたまたま)懇意な女房がいて、(そのつてを介して)たいそう切実に(胸の内を)申し上げつけなされたのだけれど、(姫君は)このような(恋愛の)向きは(もはや)まったく念頭に置いておられないことであつて、お返事(をなさる)など思いも寄られなかつたのに、少納言の君といつて、根っから好色な様子の若い女房が(情に絆されて)、何の慮りもなく、(とうとう)お二人がお休みになつてゐるお部屋へ(と少将を)導き申し上げてしまつたのだつた。(実は)以前から(恋慕の)お気持ちがありだつたこととて、(少将は、姉である)姫君(の方)を素早く抱いて、御帳台の中へお入りになつてしまわれた。(突然の出来事とて、姫君が)呆然自失の状態である様子は、(物語では)いつものことなので(敢えて)書かない。

(少将は、事前に)予想しておられたよりもはるかに、(姫君のことが)しみじみと愛しくおのずとお思いになられるので、すぐに人目を忍びつつお通いなさるのを、父(右大将)殿がお聞きになつて、

「(相手の姫君の)身分(や家柄)などに不満があるうはずはないけれども、どうして(わざわざ)ひどく生活不如意なお宅に(通う必要があるのか)」

などと、容赦なくおっしゃるので、(少将は、)思っているほど(頻繁)にもおいでにならない。(一方、)姫君も、しばらくの間こそ(少将を素直に受け入れられず)我慢して過ごしていらしたけれど、とはいえ、いつまでもそのような(心理)状態でいらつしやれるはずもない。こうなる運命だつたのだと、みずからにいい聞かせなされて、徐々に(少将の愛の)虜とおなりになるありさまは、一段と可憐で胸を打たれる。(そうした状況の中で、やっと一夜を過ごされた翌日の)昼間など、自然と寝過ごしなされた折に(少将が)ご覧になると、(白日のもとに晒された姫君は)と

ても上品でかわいらしく、一目見るやいなや胸の痛む様子をしていらつしやる。

（姫君は）何もかもが辛く、減多に來客もない（寂しい）お住まいで、（肝心な）少将のお気持ちもたいしてあてにしがたく、「いつまで（通つていらつしやることやら）」と、おのずからもの思いに耽るのが習慣になっていらしたところ、四五日（少将の訪れが途絶えて）鬱々と経過したのを、「予期していたことだわ」と（思うにつけ）心細いので、（涙で濡れるお召し物の）袖も尋常（な状態）でないのを（ご覧になって）、われながら、「（いったい）いつ身についた習慣なのだ」と痛感されなさる。

あの方の御心に秋、いいえ、（私に対する）飽きが来る前兆が悲しいのは、草木が枯れるようにあの方の足が遠く気配（を实感してのこと）だったのだなあ。

「なぜ、（こうした）すさび書きに慣れっこになった（私の）心なのだろうか」などともいいたげに、ふつとため息が漏れて、（今日こそはと、少将の來訪を待つ夜が）しだいに更けていくので、ほんの仮眠とて、御帳台の（中にはお入りにならず、その）前にふと横になってしまわれた。

（すると、少将が、（職務を終えて）宮中から退出なさるということで、（久方ぶりに、姫君のもとへ）お出でになって（門を）叩きななさるので、（すでに就寝していた）女房たちは飛び起きて、（姉君のお部屋で一緒にお休みになっていた）中の君を（急ぎ）起こし申し上げて、ご自分のお部屋へお移し申し上げなどしているうちに、（少将は）直ちに（姫君のもとへ）お入りなさって、（父右）大將様が強引にお誘いになったために（断ることができず）、長谷寺へ参詣していた間の出来事などをお話しなさっていると、先刻の手習いが（そのままにして）あるのを御覧になって、

常緑の軒忍のように、永遠に（あなたを）恋い慕う（私の）気持ちをご存じなくて、（やむをえぬ事情によるほん

の数日の途絶えを、早計にも）草木が枯れる秋の景色、いいえ、私が疎遠になる気配だとお決めつけのなるのですか。

と書き添えてお見せ申し上げると、（姫君は、）ひどく恥ずかしくて、お顔を（袖の中に）引き入れ（てお隠し）になる様子が、たいそう可憐で幼げな印象を与える。

【余説】

両親を失った姉妹の物心両面で頼りない日常が、形容詞「心細し」の四度におよぶ使用により印象づけられる。別途「心憂し」の語も見えているが、こちらは次節で二度用いられ、「心細し」から「心憂し」へという様相の推移が見て取れる。

ところで、【注解】で述べたように、姫君の心中思惟「いつまでか」（諸本「いつまで」）が、堀河院歌壇の重鎮であり名歌人でもあった、藤原公実（天喜元年（一一〇五）〜嘉承二年（一一〇七））歌の第三句を引いた表現だと認めるならば、本作品の成立は、十二世紀初頭頃である可能性が高くなる。ただし、先行歌第三句の引用は引歌の作法としては異例であり、この点なお後考に俟ちたい。

二——右大臣の少将と中の君の契り——

【本文】

かやうにて明かし暮らし給ふに、中の君の御乳母なりし人は失せにしが、娘一人あるは、右大臣の少将の御乳母子の左衛門の尉じようといふが妻なり。たぐひなくおはするよしを語りけるを、かの左衛門の尉、少将に、

「しかじかなむおはする」

と語り聞えければ、按察使あぜちの大納言の御もとには心とどめ給はず、あくがれありき給ふ君なれば、御文などねむころに聞え給ひけれど、つゆ「あるべきこと」ともおぼしたらぬを、姫君も聞き給ひて、

「思ひのほかにあはあはしき身のありさまをだに、心憂く思ふことにて侍れば、まして、強きよすがおはすなる人を」などのたまふもあはれなり。さるは、いくほどのこのかみにもおはせず。姫君は、二十に一つなどやあまり給ふらむ。中の君は、今三つばかりや劣り給ふらむ。いと頼もしげなき御さまどもなり。

左衛門、あながちに責めければ、太秦に籠り給へる折をいとよく告げ聞えてければ、何のつつましき御さまならねば、ゆくりなく入り給ひにけり。

姉君も聞き給ひて、

「わが身こそあらめ、『いかでこの君をだに人々しくもてなし聞えむ』と思へるを、さまざまにさすらふも、世の人聞き思ふらむことも心憂く、亡き影にも、いかに見給ふらむ」

『思はぬ方にとまりする少将』 注解

と恥かしう、契り口惜しうおぼさるれど、今はいふかひなきことなれば、「いかがはせむ」にて見給ふ。これもいとをろかならずおぼさるれど、按察使の大納言聞き給はむところをぞ、父殿いと急に諫め給へば、今一方よりは、いと待ち遠に見え給ふ。

この右大臣殿は、右大将の北の方の御兄人^{せうと}にもおし給へば、少将たちもいと親しくおはする。かたみにこのしのび人も知り給へり。

右大臣の少将をば、権の少将とぞ聞ゆる。按察使の大納言の御もとに、この三年ばかりおはしたりしかども、心とどめ給はず、世とともにあくがれ給ふ。このしのび給ふ御ことをも、「大将殿におはする」など思はせ給へり。いづれも、いとほしき御ふるまひを、あながちに制し聞え給へば、いといたくしのびて、大将殿へ迎へ給ふ折もあるを、いと軽々しうつつましき心地し給へど、

「今は、のたまはむことをたがへむもあいなきことなり。あるまじき所へおはするにてもなし」
など、さかしだち勧め奉る人々多かれば、われにもあらず、時々おはする折もありけり。

【注解】

○右大臣の少将―底本はか少数の伝本で「右大臣の中將」。「中」は「少」の頻繁に起こる誤写。よって、他本により改めた。○失せにしが―「が」は逆接の接続助詞。○まして―底本以下現存諸本すべて「まこと」に。しかし、「まことに」では、この語がわざわざ用いられた必然性が説明できないように思う。ゆえに、「し(之)」「し(事)」「漢字「事」」「こと(己止)」、かつ「て(天)」「に(耳)」の誤写を想定し、本文を「まして」に改めた。姫君は、まだ正妻のいな

い、右大将の少将と自分との思いがけない契りでさえ不安定で嘆かわしいのに、「まして」、揺るぎない正妻が、すでにと聞く右大臣の少将を妹のもとに通わせるなど論外だ、と述べているのである。「副助詞「だに」」接続助詞「ば」＋副詞「まして」」の構文。参考「六条わたりにだに」、離れまざりたまふめれば、まして荒れたる宿は、あはれに思しおこたらずながら、ものうきぞわりなかりける」（『源氏物語 末摘花巻』）「しばし籠りたまへりしほどだに天の下の騒ぎなりしかば、まして悲しと思ふ人多かり」（同薄雲巻）「御前近き紅梅の色も香もなつかしきに、鶯だに見過ぐしがたげにうち鳴きて渡るめれば、まして、『春や昔の』と心をまどはしたまふどちの御物語に、をりあはれなりかし」（同早蕨巻）等々。○何のつつましき御さまならねば」ならねば」は、底本ほか諸本「なれは」。しかし、これでは文意が通らないため、「れ（礼）」は「ね（襪）」の誤写、かつ、「ら（良）」一字の連綿に伴う消失を想定して、「ならねば」に改めた。○ゆくりなく―底本以下主要諸本「故／ゆへもなく」。「故」は仮名表記の方がもとであり、「へも（部毛）」は「くり（久利）」の明白な誤写。よって、李下亭文庫本等と同形本文「ゆくりなく」に改訂した。○いと急に―形容動詞「急なり」は、その人物の短気性急な性格を表す。参考「いとよき人なれど、いと急に強き人になむ侍る」（『うつほ物語 国譲下巻』）「さればよ、いと急にものしたまふ本性なり」（『源氏物語 夕霧巻』）など。○この右大臣殿は―底本ほか諸本「右大臣殿の少将」。この誤謬本文が、以下の系譜説明に混乱を来す元凶となる。すなわち、圈点を付した「の少将」の三文字は、「この」が指示する人物を「父殿」ではなく息子の「少将」と勘違いした書写者某によるさかしらな補入なのであって、これを削除するのが正しい措置といえるのである。○右大将の北の方―「右大将」は底本以下ほとんどの伝本で「右大臣」。「臣」と「将」の交替はしばしば見られる現象であり、ここも「将」↓「臣」の誤写と判断しなければならない。要するに、右大臣と右大将の北の方が兄妹だったので二人の少将は従兄弟同士の間

柄となり、そのためお互いの秘めごとを共有できるほど仲がよかったというのである。○いとほしき御ふるまひを——底本「いとおかしき御ふるまひも」。まず「いとおかしき」の部分だが、諸本「お／を」の仮名遣いの相違があるだけで一致している。けれども、「いとをかしき」＝「たいそう風流な」では意味がそぐわない。よって、「か」を衍字とみて本文を「いとほしき」に改訂した。当該文脈における形容詞「いとほし」は、（父親たちから見ても）困った、好ましくないなど、困惑、嫌悪の心情を表す。参考「しひていとほしき御ふるまひの絶えざらむもうたてあるべし」（『源氏物語』空蟬巻）など。また、「御ふるまひを」の「を」は、底本ほか多数の伝本で「も」。これも不審本文といえ、「を（遠／越）」↓「も（毛／茂）」のありふれた誤写を想定するのが至当。ゆえに今、三手文庫本と同形の「を」に改めた。

【現代語訳】

（姫君が）このような状態で日々を過ごしていらしたところ、中の君の御乳母だった方は亡くなったけれど、娘が一人いるのは、右大臣の少将の御乳母子の左衛門の尉という者の妻であった。（ある時その妻が、故大納言家の中の君が）比類なく（美しくて）いらつしやるしだいを語ったのを、先ほどの左衛門の尉が少将に、

「これこれしかじかでいらつしやいますこと」

とご報告申し上げたところ、（右大臣の少将は、正妻である）按察使の大納言のお嬢様の所には愛着を感じにならず、あちらこちらの女性のものとへふらふらとお出でになる（ようなご性分の）方だったので、（この情報を得てから、恋心をお訴えになる）お手紙などを熱心に差し上げなされたけれど、（中の君の方は）まるっきり「お受けするのがよい

こと」ともお思いでないのを、姫君もお聞きになって、

「思いがけず（独身のあの方と関係をもった）私自身の不安定な現況でさえ憂慮される状態ですので、ましてや、磐石の正妻が（すでに）いらつしやると聞くお方を（通わせるなどもつてのほかです）」

などとおつしやるのも健気である。とはいうものの、どれほどの年長でもいらつしやらない。

（姉の）姫君は、二十歳に一歳ほど超えておられるのであろうか。（一方、妹の）中の君は、

（姫君より）もう三つほど年下でいらつしやるのだらうか。（今さらながら）たいそう頼りなく見える（お二人のご様子である）。

（さて、）左衛門（の尉）が、強い口調で責め（立て）たので、（妻は、姫君が）太秦に参籠なさる時期を（知らせ、左衛門の尉がそのことを）たいそう首尾よく申し上げてしまったために、（右大臣の少将は、姫君ご不在の折から）何のご遠慮もいららない（お屋敷の）ありさまゆえ、（中の君のお部屋に）突然侵入してしまわれたのであった。

姉君も、（戻られてからその話を）お聞きになって、

「自分の身はともかく、『どうかして、この（妹）君だけでも普通の人並みにお世話申し上げたい』と思っていたのに、（二人）それぞれに落ちぶれて寄るべないのも、世間の人が聞いて思っているであらうことも嘆かわしく、（また、）亡き両親にも、どのようにご覧になつてゐるだらう」

と恥ずかしく、（こうした）宿縁を残念にお思ひになるけれど、（すべてが既成事実となつてしまった）今となつては、いっても仕方のないことなので、「どうにもしようがあるまい」といった（諦めの）心境で（成り行きを）静観なさる。こちら（の少将）も、（中の君のことを）並一とおりでなく（愛しく）お思ひになるけれど、按察使の大納言が（この

ことを）お聞きにな（つたら、さぞや不快にお思いに）るであろうその点を、父右大臣殿が仮借なくお諫めなさったので、（少将は氣ままに出向くこともできなくなり、そのために中の君は）もうお一方（の姉君）に比べて、（訪れが）ひどく待ち遠しそうな様子である。

（ところで、ご子息を嚴重注意なさった）この右大臣殿は、右大将の奥方の御兄弟でいらしたので、（従兄弟同士となる）少将たちもたいへん親密（な間柄）でいらつしやる。（だから、）お互いに密会している女性（のことについて）も（当然のごとく）ご存じであった。

（お二人のうち、）右大臣の少将を、権の少将と申し上げる。（正妻である）按察使の大納言の（姫君の）お所に、こ三年ほど（しぶしぶ）いらつしやつたけれども、（その姫君）には愛情をお感じにならず、折に触れて（他の女性たちのもとへと）情念の趣くままにお越しになる。（そのようなありさまだったので、この故大納言の中の君）との秘密になさっているご交際をも、「（今宵は）大将のお屋敷においでになる」などと（周囲に）思わせ（欺い）ておられた。どちら（のお父上）も、（ご子息の）好ましくないご行動を、過剰なほどご制止申し上げなされたので、（少将たちは、）極秘裏に、（ご姉妹を）大将邸へお迎えなさる折もあるのを、（ご身分柄、そのようなかたちでの密会は）ひどく軽率でできれば避けたい気分がなさるが、

「今となつては、（少将様から大将邸に出向かれるよう）ご指示があった場合、もしそれに背くとするなら無益なことです。お出でになつてはならない所へいらつしやるわけでもありません（し）」

などと、利口ぶつてお勧め申し上げる女房たちが多いので、（ご姉妹は、まるで何かに）操られたかのように、時々いらつしやる折もあったのだった。

【余説】

父親からともに嚴重注意を受ける破目に陥った少将たちは、それぞれのお相手を口実を設けやすい右大将邸に呼び出すという苦肉の策に出る。故大納言家の姉妹にとつては屈辱的な召人待遇だったが、周囲の勧めるままに赴いていた。と、この状況こそがその後の思いがけない運命のいたずらと呼ばひ込む伏線となるのである。右大将の北の方を軸に二人の少将の血縁關係を設定した作者の、けだし巧妙な趣向と評せよう。

三 — 右大臣の少将と姫君の契り —

【本文】

権の少将は、大将殿の上の、御かぜの氣おはすることにづけて、例のとまり給へるに、いともの騒がしく、客人な
ど多くおはするほどなれど、いとしのびて御車奉り給ふに、左衛門の尉もさぶらはねば、時々もかやうのことにいと
つきづきしき侍にささめきて、御車奉り給ふ。大将殿の上例ならずものし給ふほどにて、いたく紛るれば、御文もな
きよしをのたまふ。

夜いたく更けて、かしこにまうでて、

「少将殿より」

とて、

「しのびて聞えむ」

『思はぬ方にとまりする少将』 注解

といふに、人々皆寝にけるに、姫君の御方の侍従の君に、

「少将殿より」

とて、御車奉り給へるよしをいひければ、寝惚^はけにける心地に、

「いづれぞ」

と尋ぬることもなし。「例も参ることなれば」と思ひて、

「かうかう」

と君に聞ゆれば、

「文などもなし。『かぜにや、例ならぬ』などいへ」

とのたまへば、

「御使ひ、こち」

といはせて、妻戸を開けたれば、寄り来るに、

「御文など侍らぬは、いかなることにか。また、『御かぜの気のものし給ふ』とて」

といふに、

「大将殿の上、御かぜの気のむつかしくおはして、人騒がしく侍るほどなれば、『このよしを申せ。前々御使ひに参り侍る人もさぶらはぬほどにて』など、かへすがへすおほせられつるに、むなしく帰り参りては、かならずさいなまれ侍りなむず」

といへば、参りて、

「しかじか」

と聞えて、勧め奉れば、例の、人のままなる御心にて、薄色のなよやかなるが、いと染み深うなつかしきほどなるを、いとど心苦しげに染ませて、乗り給ひぬ。侍従ぞ参りぬる。

御車寄せて降りし奉り給ふを、いかで「あらぬ人」とはおぼさむ。かぎりなくなつかしうなごやかなる御けはひは、いとよいかよひ給へれば、少しもおほしも分かぬほどに、やうやう「あらぬ」と見なし給ひぬる心惑ひぞ、うつつとはおぼえぬや。かの昔夢見しはじめよりも、なかなか恐ろしうあさましきに、やがて引き被^かき給ひぬ。

侍従こそは、

「いかに侍ることにか」

と、

「これはあらぬことになむ。御車寄せ侍らむ」

と泣く泣くいふを、さばかり色なる御心には、許し給ひてむや。寄りて引き放ち聞ゆべきならねば、泣く泣く几帳のうしろにゐたり。

男君は、ただにはあらず、「いかに」とおぼさるることもやありけむ、いと嬉しきに、いたく泣きしづみ給ふけしきもことわりながら、いと馴れ顔に、かねてしも思ひあへたらむことめきて、さまざま聞え給ふこともあるべし。隔てなくさへなりぬるを、女は、死ぬばかりぞ心憂くおほしたる。かかることは、例の、あはれも浅からぬにや、たぐひなくぞおぼさるる。

【注解】

○ほどなれど—底本ほか「ほどあれと」。「あ(阿)」は「な(奈)」の明らかな誤写。よって、三手文庫本等多くの伝本と同形の「ほどなれど」に改めた。○時々も—下に「使ひ給ひし」ほどの意を補つて解いた。このあたり不文。○君に「姫君」のことだが、ここは女房からみた主人の意なので、「君」と記される。○侍らぬは—底本ほか主要諸本「侍ねは」。そのまま「侍らねば」でもひとまず意味は通じるが、「ね(襌)」は「ぬ(奴)」の誤りと考えた方がよい。したがって、李下亭文庫本等一部末流伝本と同形の本文「侍らぬは」に改めた。○御かぜの氣—姫君の口実に対し第三者の事実をもつて応酬させるおもしろさ。読者をも混乱に巻き込む設定と物語展開を図る作者の工夫は、こういった細部にも施されているのである。○勧め奉れば—底本ほか「すゝめたてまつれと」。この「と(止)」は、いうまでもなく「は(者)」の誤写。よって、三手文庫本等により改めた。接続助詞「ば」と「ど」が書写の次元で容易に交替することを、この際強調しておきたい。○いと染み深うなつかしき—参考「ありつる扇御覧すれば、もて馴らしたる移り香いとしみ深うなつかしくて、をかしうすさび書きたり」(『源氏物語』夕顔卷)「唐の縹の紙の、いとなつかしうしみ深う匂へるを、いと細く小さく結びたるあり」(同胡蝶卷)など。○いとど心苦しげに染ませて—異文も多く不審。釈然としないが、あるがままに解釈した。○なごやかなる—底本ほか「なめやかなる」の本文だが、形容動詞「なめやかなる」は用例がない。「なご(己)やかなる」↓「なに(二)やかなる」↓「なに(児)やかなる」↓「なめ(免)やかなる」の誤写過程が想定可能であるため、本文を「なごやかなる」に改訂した。「己」と「二」、「児」と「免」の草体はいずれもきわめて紛れやすい。参考「いますこしなまめかしき氣添ひて、なつかしうなごやかにぞおはします」(『源氏物語』賢木卷)「月影のけはひなつかしく、なごやかなるさま」(『夜の寝覚』卷二)など。○いかに侍るにか—

底本「いかにと侍事にか」。諸本同じだが、「いかにと」の「と(止)」は、上の「に(二)」との字形相似に惑わされて生じた衍字とみるべきである。ゆえに今これを削除した。「いかに侍る」は「いかにある」『「いかなる」の丁寧形。参考「いかに、いかにほべりけることにか」(『源氏物語 行幸卷』「人々も、いかにほべりしことにか」など、御氣色見たてまつれど」(同総角卷)など。○「いかに」と底本ほか諸本「いかに」。ここは、権の少将の心底を推し量る草子地であり、前項とは逆に、「いかに」に下接する引用の格助詞「と」は不可欠。よって、今これを補った。○かねてしも思ひあへたらむことめきて―右大臣の少将は、事態をまるで予見していたかのように振舞うのである。

【現代語訳】

(そんなとある夜、)権の少将は、(右)大将殿の奥方が、お風邪の症状がおりであるのかこつけて、いつものように(大将邸に)お泊りになっていらしたので、(お屋敷の中が)ひどく落ち着かず、(お見舞いの)客人などが大勢来訪なさる時分ではあるけれど、たいそうこつそりと、(中の君のもとに)お(迎えの)車をご手配申し上げなさるが、(折しも、事情を熟知しているあの)左衛門の尉も(お側に)お仕えしていなかったので、(少将は、これまでも)幾度か(起用したことのある)、このような役目にたいそう向いている侍に(段取りを)耳打ちして、お車を差し向け申し上げなさる。(何せ、右)大将殿の奥方が(お風邪を召して)体調不良でいらつしやる時分とあつて、(邸内が)とてもごたごたしているの、(今夜は、いつも差し上げる)お手紙(をご用意する余裕)もない事情をご説明なさる。(さて、その侍が、)夜がたいそう更けて、あちらに参上して、

「少将様から(の使いです)」

といつて、

「(ご主人に) 密かにお伝え願えませんか」

といったのだが、(あいにく、中の君方の) 女房たちは全員寝てしまっていたので、(侍は仕方なく、) 姫君のお部屋(付き)の侍従の君に、

「少将様から(の使いです)」

といつて、(お迎えの) お車をご用意申し上げたしだいを伝えたところ、(侍従の君は、) すっかり寝ぼけ(て、いまだぼんやりし) た心地であつたがために、

「どちら(の少将様) ですか」

と確認することもない。「普段も(こうして) 参上することなので」と思つて、

「これこれ(このようないでございます)」

と姫君に申し上げたところ、(姫君は、)

「(おかしいわ。いつもは必ずくださる) お手紙もない。(お断わりする口実として、) 『風邪だろうか、体調が優れない』 などといいなさい」

と(慎重に) ご指示なさるので、

「お使いの者、こちらへ」

と(取次の侍女に) いわせて、妻戸を開けると、(使いの侍が) 近寄ってきたので、

「(普段どおり) お手紙などがありませんのは、どうしたことでしょうか。加えて、(姫君は) 『お風邪の症状がおあ

りになる』ということ（今夜はお断わりします）」

というと、

「（実はこちら、右）大將殿の奥方がお風邪の症状がしつこくていらして、人でごった返しております（折も）折なので、（少將様は、）『この（緊急の）事情を申し上げよ。以前からお使いに参上してありました者も側にいない時分で』などと、何度も何度もおっしゃられたのに、（もし私が）手ぶらで帰参したならば、間違いないお叱りを受けることでしょう」

というので、（侍従の君は、姫君のもとに）参上して、

「（いつもと違っておりますのは、）しかしか（の御事情によるのだそうです）」

とご報告して、（あちらへ向かわれるよう）お勧め申し上げると、例のごとく、女房の指図に素直に従うお心であつて、薄紫色の柔らかなお召し物が、たいそう深く（薫物の香りが）染みて好ましい加減であるのを、一段と（相手の）心を締めつけるかのように染み込ませて、（お迎への牛車に）お乗りになる。ほかならぬ侍従（の君が、同車してお供に）参上なさる。

（さて、右大將邸に到着すると）お車を（車寄せに）寄せて、（権の少將が手ずから）お降ろし申し上げなさるのを、（姫君は）どうして「別人だ」とはお思ひにならうか。このうえなく慕わしく温和なご様子は、（お二人）たいへんよく似通っておられたので、（姫君は）まったく識別できなくていらっしゃったところが、しだいしだいに「（この方は、右大將の少將様）ではない」と見きわめなされた（その時の）お気持ちの取り乱しようといったら、（とても）現実とは思えないことよ。（姫君は、）あの、昔見た悪夢のはじまりよりも、かえって恐ろしくどうしてよいかわからないの

で、そのまま（お召し物を）引き被りなされた。

（頼みの綱である）侍従（の君）は、

「（いったい）どうしたことでしょうか」

といい、

「これは（明らかに）間違いで（ごさいます）。（すぐさま、先ほどの）お車をお寄せください」

と涙ながらに抗弁するけれど、たいへんに好色な（権の少将の）お心からして、（姫君をひとたび捉えなされた）お手を、（素直に）緩めてしまわれるはずがあらうか。（だからといって、みずから）近寄って（無理やり）引き放し申し上げられることではないので、（侍従の君は、）泣く泣く几帳の背後に座ってい（るよりほかに術がなかつた）。た。

（こうして、姉君とも契りを交わす機会を得た）男君（の心境）は、（もちろん）尋常ではなく、（前々から）「（姉君は）どのような（な）方）であらうか」とご興味を抱かれることもあったのだろうか、とても嬉しいので、（あまりの衝撃に）ひどく泣き臥していられしやる（女君のご）様子も道理とはいえ、たいそう親しげな素振りで、（まるで）予期していたことであるかのように、あれこれと申し上げなさる（お）ことばもあるのだろう。（とうとう）隔て（となる最後のお着物）まで（剥ぎ取られて）なくなったのを、女（君）はまさに、死ぬほど辛くお思いになった。こうした（思いがけない）契りは、例によって、しみじみとした愛情も浅くないのだろうか、（少将は姫君のことを）比類なくお思いになる。

【余説】

本節に見える創作上の趣向は、右大将の北の方の「御風邪の氣」を案出した点にある。権門の奥方の病氣であるから、屋敷に仕える人間が右往左往するのみならず、権門に阿る見舞客も多く訪れ、邸内は騒然として落ち着かない。こうした「非常事態」の最中であるにもかかわらず、無謀にも恋人を迎えようとした少将たちの若さ、周到な配慮の欠如が、重大な過失を招く結果を生むという寸法である。

四 — 右大将の少将と中の君の契り —

【本文】

あさましきことは、今一人の少将の君も、母上の御かぜよろしきさまに見え給へば、「かしこへ」とおほせど、「夜などきと尋ね給ふこともあらむに、折節なからむも」とおほして、御車奉り給ふ。

これは、前々も御文なき折もあれば、何とものたまはず。例の、清季参りて、

「御車」

といふを、申し伝ふる人も、一所はおはしぬれば、疑ひなく思ひて、

「かく」

と申すに、これも、「いとはかに」とはおほせど、今少し若くおはするにや、何とも思ひいたりもなくて、人々、御衣など着せ替へ奉りつれば、われにもあらでおはしぬ。

『思はぬ方にとまりする少将』 注解

御車寄せに少将おはして、ものなどのたまふに、あらぬ御けはひなれば、弁の君、

「いとあさましくなむ侍る」

と申すに、君も心とく心得給ひて、日ごろも、いとにほひやかに見まほしき御さまの、おのづから聞き給ふ折もありければ、「いかで、『思ふとだにも』」など、人知れず思ひわたり給ひけることなれば、

「何か、『あらず』とて疎くおぼすべき」

とて、かき抱きて降ろし給ふに、いかがはすべき。さりとして、われさへ捨て奉るべきならねば、弁の君も降りぬ。女君はただわななかれて、動きだにし給はず。弁、いと近うつとらへたれど、何とかはおぼさむ。

「今は、たださるべきにおほしなせ。よに人の御ためあしき心は侍らじ」

とて、几帳押し隔て給へれば、せむ方なくて泣きあたり。これも、いとあはれ限りなくぞおぼえ給ひける。

【注解】

○なからむも——底本ほか「あからんも」。「あ(阿)」は「な(奈)」の明白な誤写であるため、本文を改めた。なお、三手文庫本等「なる覧も」に作るが、これも「か(可)」↓「る(留)」のありふれた写し間違い。○清季——隨身の名。仮に漢字を当てた。○今少し若くおはするにや——中の君が精神的により幼いことを付度する草子地。○日ごろも——平生も、普段もの意で、「思ひわたり給ひける」に係る。○おのづから聞き給ふ折もありければ——右大臣の少将から聞くのである。先に「かたみにこのしのび人も知り給へり」とあった。○思ふとだにも——壬生忠岑の歌「わが魂を君が心に入れかへて思ふとだにも知らせしがな」(『忠岑集』)を引く。

【現代語訳】

（さらに）あきれたことは、もう一人の少将様も、母上のお風邪が小康を保っているように見えなかつたので、「あちらへ（伺おうか）」とお考えになるけれど、「（母上が）夜分に急用があつて（自分を）お探しになることがあつた場合に、折しも不在であつたならば（さすがに具合が悪いだろう）」とお思いになつて、（先方に迎えの）お車を差し上げなさる。

こちら（右大将の少将）は、従来お手紙がない時もあつたので、（この度も、詳しくは）何ともおっしゃらない。いつものように、清季が（故大納言邸に）参上して、

「（お迎えの）お車（でございます）」

というのを、（主人に）申し伝える女房も、（ご姉妹のうち）お一人は（すでに）お出でになつていたので、疑う余地なく思つて、

「（こう（いうしだいでございます）」

と（中の君に）申し上げると、こちらも、「たいそう急（な呼び出し）だこと」とはお思いになるが、（姉の姫君に比べると）幾分未熟でいらつしやるのか、何ともお考えが行き届くこともなくて、女房たちがお召し物などを着せ替え申し上げなされると、わけもわからぬままにお出でになつた。

（到着なされると、）お車寄せに（右大将の）少将がいらして、お声などお掛けになると、違う（殿方の）ご様子なので、（同乗して参上した）弁の君が、

「（これは）とんでもない事態でございます」

と申し上げると、(男) 君も敏感に察知なさつて、普段も、たいそう輝くように美しく(是非実際に) 見てみたい(と思われる中の君の) ご容姿(の噂) が、自然とお耳に入る機会もありだったので、(右大将の少将としては) 「何とかして、『あなたを』愛しているとだけでも(お知らせしたい)」などと、心密かに思いつづけていらしたことで、

「どうして、『人違いだ』という理由で(私を) 疎ましくお思ひになる必要がありますようか」

といって、(牛車から) 素早く抱き降ろしなさるので、(中の君側としては、どうにも) 抗いようがない。だからといって、自分まで(主人を) お見捨て申し上げてよい道理はないので、弁の君も(やむなく車から) 降りた。女君は(恐怖のあまり) おのずとおからだが震えるばかりで、身じろぎ一つなさらない。弁(の君) は、至近距離にいてずっと(女君のお着物を) 掴んでゐるけれど、(男君は、それを) 何(の障害) とお思ひになろうか。(いとも簡単にその手を) 引き放して、女君に、

「今となつては、ただそうなるはず(の宿縁) だったのだとご観念なさいませ。決してあなたをご不幸にするつもりはありません」

といって、几帳で一方的に隔てなさつたので、(弁の君は、もはや) どうする術もなく(無念の) 涙を流しながら座っていた。こちら(の少将) も、(新たに契りを交わした女君に対して、) たいそうしみじみとしたご愛情をこのうえなくお感じになるのであった。

【余説】

本節の内容は、いわば予定調和的で前節とシンメトリックな展開となっているが、右大将の少将は、姫君を迎える際に必ずしも手紙を添える習慣がない。右大臣の少将は、中の君を迎える際には必ず手紙を添える習慣がある、という設定のはずが、いつしか逆になって崩れてしまったように見える。そうだとすれば、それは作為か、それとも、錯誤か。

五 — それぞれの契り —

【本文】

おのおの帰り給ふ暁に、御歌どもあれど、例の、漏らしにけり。男も女も、いづ方もただ同じ御心のうちに、あいなう胸ふたがりてぞおぼさるる。さりとしてまた、もとをおろかにはあらぬ御思ひどもの、めづらしきにも劣らず、いづ方も限りなかりけるこそ、なかなか深きしも苦しかりけれ。

「権の少将殿より」

とて御文あり。起きも上がられ給はねど、人目あやしさに、弁の君、ひろげて見せ奉る。

思はずにわが手に馴るる梓弓深き契りの引けばなりけり

「あはれ」と見入れ給ふべきにもあらねば、人目あやしくて、さりげなくて、包みて出だしつ。

今一方も、

『思はぬ方にとまりする少将』 注解

「少将殿より」

とてあれば、侍従の君、胸つぶれて見せ奉れば、

浅からぬ契りなればぞ涙川同じながれに袖濡らすらむ

とあるは、「いづ方にもおろかにおぼされじ」とにや。かへすがへす、ただ同じさまなる御心のうちどものみぞ心苦しう、とぞ本にも侍る。

「劣り優るけちめなく、さまざま深かりける御心ざしども、果てゆかしくこそ侍れ」「なほ、とりどりなりける中にも、めづらしきは、なほたち優りやありけむに、見馴れ給ふにも、年月もあはれる方は、いかが劣るべき」と、本にも「本のまま」と見ゆ。

【滴注】

○包みて出だしつ——弁の君が返歌をしたため、立文にして取次の侍女に渡すのである。○とあるは——底本以下諸本「とあるを」。格助詞「を（遠）」は係助詞「は（者）」の誤りとみて改めた。「は」は「+意志の助動詞+とにや」の構文。参考「かくのたまふは、おとどに悪しと思はせてまつらむとにやあらむ」（『うつほ物語』忠こそ巻）「ただにこそ見めと思さるるは、人には言はせじ、我ひとり恨みきこえんとにやあらむ」（『源氏物語』宿木巻）など。○いづ方にもおろかにおぼされじ——「おほされじ」は、底本ほか現存諸本ことごとく「おほせられん」。だが、この文脈における「おほせらる」の使用には疑問が残るうえに、文末が意志の助動詞「む／ん」ではいかにも不自然であって、むしろその打消し形「じ」とありたいところ。ゆえに、「おほせら（世良）れ」は「おほさ（左）れ」の、「ん（无）」は「し（之）」

の誤写とみて改めた。どちらの女性にも愛情疎かには思われたくない、という虫のよい男性心理を指す。○御心のうちども―「うちども」は、底本ほか「うちと」。三手文庫本等により「も」一字を補った。「と（止）」と「も（毛）」の字形酷似に原因する脱落と思われる。

【現代語訳】

（女君たちが）銘々お帰りなさる明け方に、それぞれ（男君からの）お歌があるけれど、例によって、書き漏らしてしまった。男君も女君も、どちら（の組）もまったく同じご心境であるが、（男君たちは）むやみに胸がいっぱいになって感慨無量でいらつしやる。だからといってまた、本来のお相手を疎かにはなさらない（お二人の）ご愛情が、新たなお相手にも（勝るとも）劣らず、両方ともこのうえなかつたのが、かえってその深い愛があだとなって苦しいことであつた。（中の君のもとに）

「権の少将殿からです」

といって、（右大将の少将から後朝の）お手紙がある。（中の君ご自身は、衝撃の甚大さゆえに）起き上がることもお出来にならないが、（そのままにしては）周囲が怪しむので、弁の君が、（ご主人にお手紙を）広げて見せ申し上げる。偶然私の手に馴染んだ梓弓よろしく、思いがけず私のものとなつたしなやかなあなた（の肢体）よ。これも、まるで梓弓を引くように、前世からの深い因縁が私たちを引きつけたからだつたのですね。

「ああ嬉しい」と（お思ひになって、中の君がこのお歌を）じつくりとご覧になるはずもないので、（弁の君は）人目を憚って、何食わぬ顔で（返歌をしたため、きちんと）包んで（使いのもとへと）出した。

『思はぬ方にとまりする少将』 注解

もうお一方（に）も、

「少将殿からでございます」

といって（右大臣の少将からの後朝のお手紙が）あるので、侍従の君は、肝を冷やして（姫君に）見せ申し上げると、浅くない（前世からの）ご宿縁だからこそ、私の（自然と溢れ出る）涙は川となって流れ、（本来のお方と）一つご血縁（のあなた）を思つて、同等に袖を濡らしているのでしょうか。

とあるのは、「どちらの女君にも、愛情疎かにはお思いになられまい」という（おつもりな）のだろうか。（それにつけても）重ね重ね、まったく同じ（女君たちの）ご胸中だけがひたすらお気の毒に（思われて…）、と（もとの）本にも（書いて）あります。

「優劣の区別なく、それぞれに深かった（男君たちの）ご愛情が、その後どうなったのかを（何よりも）知りたいことです」「やはり、とりどり（に魅惑的）だった間柄でも、目新しいお相手は、何といつても（当初は）優位であつただろうが、（しだいに）見馴れなさるにつけても、長いことご愛情を注いできたお方は、どうして劣るはずがあらうかと、（もとの）本のも「本のまま」と見える。

【余説】

事実Ⅱマコトは「昔物語」より奇なりということであろうか、語り手が遠い過去に身近で見聞した「いとありがたき」話の回想録として始動したはずの本作は、すぐにそれが「物語」Ⅱソラゴトの世界にほかならないことを、何の悪びれる様子もなく暴露し、対称的かつ複雑な趣向を盛り込みながら物語は進行する。

そして、締め括りがこれである。享受者の関心の的となるそれぞれの恋の顛末についてはもとより描くべくもなく、「本にも侍る」「本にも『本のまま』と見ゆ」と二重韜晦の手法を用いることで、体よく糊塗し、完結させてしまうのだから恐れ入る。あえて本作を評価するならば、全篇を通じて策士策に溺れた感なきにしもあらずといえるのではなかろうか。

